

七 俱胝一指頭の禪

朝あさから晩ばんまで、『俱胝佛母陀羅尼』ばかり讀よんで、俱胝和尚ぐわんばの名なを貰もらつた和尚しやうが、唐朝とうたうの中頃なかごろに居あました。普通ふつう一ヶ寺じの住持じゆじになりすまして、頑張ぐわんばつて居ある處ところへ、一人にんの尼僧あまんがやつて來きた。「御免ごめん」とも何なんとも云いはず、いきなり座敷ざへ上あがつて、笠被かさかぶつたまゝ鞋穿わらじはいたまゝで、ツイと奥座敷おくざしきに入るいるや、否いなや和尚しやうの坐すわつてゐる禪床ぜんせうをグルグルツと三遍べんまはつた。誠まことに眼中がんちゆう和尚しやうなしと云いふ振舞ふるまひ。そしてその言いひ草くさが悪にくらしい。「道いひ得えば即すなはち笠子りつしを下くださん」何どうか一句く有難ありがたい事ことを云いふたら、笠脱かさぬいで禮拜らいはいもしませうが、さあ何どうでござると云いふ勢いきおひ。和尚しやう一向かうに口くちが開あかない。如何いかでござる、云何どうでござると、疊たたみかけられても返辭へんじがぬ。眼めばかりパクつかせてゐる。全然まる蟄蛙ひげがへるの化物ばけものみたやうな有様ありさま。尼あまさん尠すくなからず愛想あいさうつかしたものが、こんな馬鹿面ばかづら和尚しやうがと云いぬばかりに、ツイと庵室あんしつを出でて行いつた。時恰ときあたかも夕暮ゆうかたである。「云何どうちや泊とまつて行ゆかれたら、日ひも暮くれかゝつて、何いづれ何處どこにか泊とまらねばなるまいに」と云いば、尼あまさん、すかさず遣やり返かへす。「道いひ得えば即すなはち住とどまらん」何なんとか法門ほふもんを云いうて聞きかつしやい。そんなら投泊とまりもしませう、さあ云いうて見みさつしやいと來きて、和尚しやうまたも答こたへが出來でぬ。据人形すゑにんぎやうそのまんまに口くちあんぐり。尼あまさん、こんなヤクザ和尚しやうの處ところに泊とまつたからとて何なんになると、嘲あざける心こころを姿すがたに見みせて、サツサと出でて往いつて仕舞しまつた。

あとで和尚しやう、殘念ざんねんでたまらない。身みは頭あたまを剃そつて袈裟けさかけて、禪宗坊主ぜんしゆうぼうずと云いうて居あながら、僅比丘尼わづかひくにの一間もんに何なんの答こたへも出來でぬとは、耻はづかしい情なさけない最早もはや一刻こくも平然じつとして居をれぬ。寺てらも何なんも打捨うちすて、天下てんかを遍歷へんれきし、名師めいしを求め修行しゆぎやうしやうと思おもひ定めました。すると其夜そのよの夢ゆめに、鎮守ちんじゆの山神やまのかみが現あられて、「それだけ堅固けんこの願心ぐわんしんがあれば、何なんも寺てらを捨すて、遠とほく他所よそに行くゆには及およばぬ

近い内に必ず肉身の菩薩が出て来て、爲に法を説くから、就いて充分修行せよ」と勧めるのを感得した。一週間目に果して天龍和尚と云ふが出て来た。馬祖道一門下の尊宿、大梅法常禪師の法嗣たる天龍和尚、この人ならばと、先日じつの事を語つて、呉々も教を乞ふた。すると天龍和尚は何も云はずに、スーツと指一本ゆび ほん立てる。その刹那、俱胝、豁然として大悟し、今迄の大疑團がガラリと解けた。爾來指一本の味が甘く手に入つて、何でも彼でも指一本。「如何なるか是れ佛法の大意」指一本グツと立てる。「如何なるか是れ祖師西來の意」指一本ニユツと出す。今日は好い天氣でござる、指一本。近頃嚴しう寒うござる、指一本。お障りもござらぬか、指一本。恁んな有様に何を尋ねても、指一本でやつける。一生涯指一本使ひ使つたが、まだ使ひ盡せぬと、死に際まで叫んだと云ふ次第。「俱胝一指頭の禪」と云つて、それが俱胝和尚の名物となつた位。

この有様を始終見てゐた侍者たる童子。十四五歳にもなつてゐたらう、いつしか之を眞似て、矢張り指一本立てる。此頃和尚は云何な説法せらるゝか、指一本。身體ばかり大きくなつてもいかぬぞ、指一本。お主もこれから坊さんになるだらうが判るか、指一本。和尚の眞似ばかりでつまらぬぞ、指一本。而も童子は得意満面であります。此事をそつと俱胝和尚に知らせた者がある。「よしきた一つ試してやらう」と和尚の非常手段。和尚は童子を喚んでいきなり「其方は佛法を會得して居ると云ふが本當か」。「左様!」。云ひもあへぬに和尚。「如何なるか是れ佛?」。童子ズツと指一本出した。「この野郎生意氣に……。」と、隠し持つたる小刀で、ズボリとその指を切り落して仕舞つた。さあ堪まらない。アイタ、と悲鳴を擧げつゝ室内を走りまはる途端。「こら小僧」と呼び留めた。チラと顔を向けるなり、「如何なるか是れ佛?」ハツと指

を示され、ありもせぬ指を豎てやうとして手を擧げた刹那。忽然大悟して本眞のものが手に入った。

あはれ天龍の指・俱胝の指・小僧の指、指に違ひはないが、その心に就ては大違。形だけを眞似たのでは仕方がない。指一本グツと示された時、ハツと一を悟る。一は一心である、一向である。「汝一心正念にして直に來れ」と一を以て示された時、ハツと一を以て受取る。拵へた一心でも、眞似た一向でもいかぬ。凡夫自力の手前味噌がズボリ斬り落された時、かゝる者をと、如來の親心がぞつこん入り込んで下さる。「親鸞一人が爲めなりけり」と、まるく呑み込まれた處は、もう自由自在だ。「一生受用して盡さず」願力の大道は、一生受用してもく盡さず、自力根性の指がすつかり無くなつた時、善知識の言葉の下に歸命の一念が発得する。「眞心徹到して苦の娑婆を厭ひ、樂の無爲を欣ひ、永く常樂に歸すべし。但し無爲の境は輕爾にして即ち階ふべからず、苦惱の娑婆は輒然として離るゝことを得るに由なし。金剛の志を發すに非ずよりんば、永く生死の元を絶たんや。若し親り慈尊に従ひたてまつらば、何ぞ能く斯の長き歎きを免れん」。『序分義』